

個人蔵書と大学図書館、あるいは紙の本の黄昏 ——大学図書館の個人文庫を通してみえてくること——

松田 潤・長谷部宗吉

プロローグ

札幌大学女子短期大学部に置かれている司書課程で筆者二人がともに定年を迎えるにあたって、互いに顔を見合わせてため息をつくのは研究室の蔵書のことだ。同じ教育課程で教えていたので専門書についてはほとんど重なっている上に、可能な限り図書館にも入れるようにしていたので、図書館に置いてゆくのも難しい。それ以上に図書館の予算、整理人員のことなど内実を十二分にわかってしまっているのも、ますますお互いに暗い顔になるというものだ。

1. 大学教員の蔵書処分

多くの大学教員が研究室を明け渡すに際して困っているのが蔵書の処分だ。これは別に大学教員に限ってのことではない。増え続ける蔵書についての悩みは、さまざまに書かれてきた。最近では西牟田靖の『本で床が抜けるのか』という面白い本が出版され、一部で話題になったほどだ。

まずは、編集者・評論家の後、大学教員として勤務した和光大学図書館長でもあった津野海太郎が自らの定年後の話として、老人読書エッセイ『百歳までの読書術』で述べる蔵書問題から始めよう。津野によると、文字どおり本の山に埋もれて死んだ著述業の友人たち、草森紳一と久保覚の話に続けて自身の蔵書の整理について語られる。

「平均して蔵書数が最も多いと思われるのが大学教師である。もともと本好きの上に、研究室という名の専用書庫が大学からタダで提供され、やはり研究費の名目で内外の本があるていど自由に買えるから、草森・久保

クラスの蔵書家はいくらもいる。科学史家の村上陽一郎もその一人らしく」と、大学教員の蔵書問題に移り、村上陽一郎の『あらためて学問のすすめ』からの引用になる。

「20年前に新築した家の書庫……は、とうの昔に満杯、廊下から玄関まではみ出し、堪りかねて近所に借りたアパートの一室もすでに溢れてしまい、さらに以前勤務した大学の研究室に保管した書物は、トランク・サービスに預け、その数段ボール箱70個、預け先の都合で引き上げることになり、今の大学の研究室に眠ったまま、間もなく退職を迎えて、どうしようと、迷うばかりです。……私が死んだら、皆処分して構わないと言い置いてはありますし、間違っても、図書館に寄付などして、こんな貧しい蔵書なのかと、死に恥を晒すようなことはしてほしくないのです。もっとも最近はどこも図書館も、新刊書を受け入れるだけで手一杯で、おいそれと引き取ってくれないのではありますが」と引用した上で、津野自身の感想を書く。

「いまの図書館は本の寄贈や買い取りをあまり歓迎しない。公立図書館はもとより、予算の削減に悩む大学図書館からも、教師や元教師が残した蔵書をまとめて引きうけるというような余裕は急速に失われつつある。空きスペースも整理する人手もないから無償でもだめ。やむなく貴重な近代文学資料を一括してアメリカの某大学図書館におさめた、というような話がいくらかもあるのだ。」(津野 2015, 18-30)。

これらと比較すると梅棹忠夫の場合は時代が違っていたのと、立場が違っていたというべきか、ずいぶんと事情は違っている。

梅棹が初代館長となった国立民俗学博物館の図書館にすべての蔵書を一括して「梅棹忠夫文庫」として在職中に受け入れてもらっていた。ただ梅棹自身の手になる「個人文庫の形成と管理」(梅棹, 1993b)の文章からは明らかにされていないが、1986年に起きた梅棹の突然の失明が関係していると思われる(梅棹, 1995)。

また、梅棹忠夫は国立民族学博物館のほかにNIRA(総合開発機構、梅棹当時は内閣府所管)など複数の公共組織の仕事をしていたうえに、中央

公論社から著作集を出版するということでの執筆を抱えていたこともあって、大学の研究者や執筆者以上に複数の秘書を抱えて仕事をしていたようで、自身が図書の整理にも特別苦勞をした様子はみうけられない。もちろん失明という状況下では当然のことであろう。

2. さまざまな個人蔵書とその整理

蔵書をどのように整理しているかについては、イラストレーター内澤句子が7年を掛けて31のさまざまな研究者・著述家の書齋と図書館を挿絵付きでルポルタージュした『センセイの書齋』で最近の事情が、持ち主のことばを使って語られる。

「僕は図書館は利用しません。だって借りてきた本というのは返さなきゃならないじゃない。あ、あれは前に読んだアレだな、と思ったときに、手元になかったら、そのアイデアはパーになっちゃう」といい、個人蔵書の重要性を語る書誌学者林望がいる。

いっぽうで、地域誌の編集から著述家（その後病に倒れるまでは東京国際大学で教員）となった森まゆみは「あたしは基本的に物持つの嫌だし、男の人みたいに収集癖もないから、そんなに本はないわよ」……「古本屋さんたちと友達になって。彼らから直接得る知識は面白かったなあ。ある本について質問をすると、それは何年に誰が書いて相場はいくらって返ってくるの。みんなで飲むついでに他の古本屋で本の見方を教わったり。本当に楽しかった。今でも古書目録を送ってくれるんで、お金のないときは書名をチェックして国会図書館にコピーしに行くわけ」と語る。

梅棹とは違うが、国語学者金田一京助を父に持つ言語学者金田一春彦は、蔵書2万冊を生前に八ヶ岳大泉図書館（2004年に北杜市金田一春彦記念図書館と改称）に寄贈している。

「大泉村の山田進村長から、話のあったときは本当にうれしかったです。私はどこか自分の勤めている大学で保存してくれるだろうと思っていたん

ですね。ところが今、大学は、先輩の先生方からたくさん譲り受けていて、いらぬというんです。めったにないような珍しい本だけを受け取れるなら受け取りたいと。すると入手の可能な本は、がらくた同然の扱いになってのこってしまうわけです。

内澤はそれに対して、「なるほど。そういえばある図書館の書庫で、某(教授の名前と思われる)文庫と称して、どんとひとかたまり、書庫の一角を占めているのを見たことがある。整理されているようにも見えなかった。言葉は悪いけれどほぼ死蔵。これでは本も浮かばれまい」と感想を述べる。

おそらくは、金田一の寄贈時の条件なのであろう、「実は送ってしまった後も、やはりちょこちょこ原稿を書いたりしますので、必要なものを図書館から送ってもらっているんです」ということのようなだ。没後の寄贈であれば、このようなことは起きない。

金田一の文庫は八ヶ岳図書館では『金田一春彦ことばの資料館』という部屋におよそ8000冊が別置されてガラス戸付きの書架に並べられ鍵が掛けられている。ただ、閲覧貸出しもできるということだ。一般の書架にも特別なラベルがつけられて並べられている。閉架には童謡などのレコードと昭和20年代からの言語学の雑誌がしまわれているとされる(内澤, 2011)。

また、集めた図書の整理についても、内澤は各自それぞれの分野や考え方から、さまざまに試行錯誤が続けられるようすもレポートされる。

上野千鶴子の場合は本の収納と分類についてである。「研究室の本棚には、本は前から後ろに3段重ねで収納される。スライド式の書架でもない限り、本を2段に詰めると背タイトルが見えない奥の本は忘れられてデッドストックになるのが一般であるが、上野はあえて3段に並べている」という。

「以前いた大学ではジャンル別に整理していました。ところが困ったことに、私たちの〈業界〉は動きが早いものですから、ジャンルが変わるんです。そのたびに配列を変えなければならないし、どのジャンルに分類していいのかわからない本も増えてきます。いちばんの問題は、ジャンル別

にすると、自分以外の人が棚から本を探すことができないし、整理することができないということでした。

そこで、ここに移ったときに、ほとんどの本を著者名の五十音別に並べました。……この方式をとってから、デッドストックがまったくなくなったんです。すごいでしょ。本が見つからないで同じ本を買うこともなくなりました。」

上野の研究室にはどこの図書館よりも女性学の資料がそろっているうえに、閲覧しやすいので、学生たちに便利に利用されており、ほとんどの本が上野の私物にもかかわらず、資料の貸し出しノートがあると書かれる。さらに、さまざまな分野のミニコミ誌が多数あって、それについて上野は次のように語る。「ここにはミニコミが大量に送られて来るんですが、それも五十音順にファイルされています。……マスコミに取り上げられてからでは遅いのです。今では、インターネット経由の情報も増えていますが」と続く。

これらの情報を管理、維持するのはもう自分ではできない量になっている。上野は「このために人手を使ってるんです。取り出した本は図書館の返却棚みたいな場所に積んでおいて、学生さんたちに『猫の手バイト』としてファストフード店並みの時給で、整理してもらっています。ファイリングも五十音順なので、どんな学生にも引き継げます」という。「アウトソーシングできることと、私の頭のメモリーの量が少なくてすむこと。……本棚を人に見せると人格がわかられてしまうから、自宅は絶対に見せません。自宅は別人格なんです。ほほほ」と。ここでは、私的な文庫とある意味公的な図書館的な文庫は別だという。

さらに、内澤のルポルタージュに登場するフランス文学者清水徹は「自分に関心のある領域の本は売らない。もういいかなと思うのはたくさんあるけれど、本というのは一度手放すと探すのが大変……僕は図書館はあんまり使わないな。図書館の分類方式は、専門家から見るとひどく使い勝手が悪い面があるんですよ。いちばん困るのはそれほど有名でもない著者が書いた評論。専門的な知識がないと、どこか畑違いのところに分類さ

れてしまって二度と出てこない。結局自分で持っていないとしようがないというか」と図書館との違いを強調する。

内澤のルポルタージュから、日本近代文学研究者曾根博義の例をもう少し引用しよう。書庫を増築するまでの悪戦苦闘を「みんなやるんでしょうけど、まず本棚に二重三重に入れるでしょ、それからあまり使わない本は段ボールに入れて押入のなかに詰め込む。イナバの倉庫を買って庭にも置いた。しかしあそこにあるとわかっていても、なかなか取り出せない。図書館に行った方が早いわけです。それか神保町の古本屋を歩いて買ってくるか。結局、つねに本の背が見えるようなかたちで置かなければ本を持っていてもしょうがないということがだんだんわかってくるわけですよ」と、ついに新たな書庫と書斎を作るにいたる。

内澤は推定の4万冊余が並べられた様子を次のように描写する「もう隅から隅まで、曾根先生の管理が行き届き、死蔵本も皆無。

並べ方も図書館のような無機質な配列ではない。こっちの一角は雑誌類、こっちは総覧や年鑑、目録、この部屋は伊藤整、こちらはモダニズム文学と、先生の研究内容に沿って、実に有機的に並べられている。

テーマ別にフレキシブルな分け方で並べておいて、部分的に五十音順など機械的な振り分けをする。こういう配列、実は簡単そうで難しい。本が少なればなんとかなるが、この量でそんなことやったら頭が追いつかなくなるはずなのに」と内澤。

「僕の持っている本は、ほとんどがいわゆる雑本なんです。近代日本文学をやっていると、その辺に転がっている文庫本も今出たばかりの雑誌も必要なんです。高いお金を出しているのは、戦前の文芸誌や同人誌くらいで。僕の蔵書は、売ったところでたいして価値にならない。だから買うよりも保存する費用の方が余計にかかるという矛盾を抱えているんです」と曾根がいう（内澤、2011）。

「雑本」といわれるものも文献資料としては重要となるという考えの延長に、ほとんどの図書館では保存されない雑誌資料を蒐集して公開している図書館として「大宅壮一図書館」があるのは、広く知られているところ

だ。こうした特殊図書館の資料こそ電子化されて容易に閲覧が可能となるのがのぞまれるところだ。もちろん財政的な保証が必要となるのはいうまでもなからう。

3. 個人文庫の目録化について

このように、やっかいだがそれぞれに苦労をして蒐集したのが個人の蔵書である。それらがさまざまな事情で、図書館に個人文庫として収蔵される。図書館の全蔵書のなかに組み込まれる場合と、書庫の一角に別置されるケースがある。いずれにしる、目録化がどのようになされるかがどうかが問題だ。法政大学の大原社会問題研究所という社会運動に特化した研究施設では社会・労働運動の個人文庫が蒐集されている。ここでは、蒐集した個人が抱えていた問題そのものが研究対象となるわけであるから、活動者の蔵書の由来に意味があり、目録作りにもどのようなものを作成するかが重要となる。利用者としても書名索引、著者（ペンネームと実名の同定を含む）索引、分類の種類、出所、典拠の有無などが問題となるだろう。ここまでする目録に要求するならば、一般的な図書館の目録作業に終わることはなくなる（若杉, 1990）。目録作成の実務者と研究者の共同作業が必要となろう。

こうした作業を続ける人員にも時間にも余裕がないのが現在の図書館だ。また、大原社会問題研究所のように専門化していないでも、少し古い時代の洋書の目録化にも困難が伴うようだ（佐藤, 1977）。しかし、これら目録化が完備しないことには個人が営々と築いてきた文化資本が公共財として生かされないことになる（国立国会図書館, 1977）（日外アソシエーツ, 2005）。

一方、一般的目録化そのものを拒否するような文庫がある。単純に梅棹が非図書資料といていたパンフレットや書簡、原稿などの目録作成の困難さ（梅棹, 1993）だけとはいえない。

札幌大学図書館の「山口昌男文庫」はその一例であろう。文庫の受入か

ら保存管理に力を注いだ石塚純一（元札大図書館長）はまず、自身の平凡社編集者としての経験を踏まえて、明治大学に収められた平凡社の百科事典編集責任者林達夫旧蔵の「林達夫文庫」を例にする。

「生前の林家にあった書物の配列をそのまま生かし、箱、カバーから葉、付箋の類もそのまま残し、内容見本や出版社のカタログ、演奏会パンフレット、コピー資料にいたるまですべてを保存するという。だが、しだいに大学図書館は個人蔵書の受け入れを喜ばなくなった。図書館が手狭になり、受入登録作業にお金がかかる故である」と述べたうえで、山口文庫について続ける。「札幌大学の地下にある山口文庫（およそ4万冊）。……大学への受け入れ当初、どう並べるかというテーマに直面した私は、著書からの連想が作り出す集合を一つの軸として、本の宇宙を構成してみようと考えた。ちょうど山口さんの著書『挫折の昭和史』と『敗者の精神史』が刊行された頃だったので、近代のあるテーマを追って集められた一群の古書が多かった。1970年代初頭の『道化の民俗学』関連と思われる洋書も次々に発見される。四面の壁面には世界の諸地域に関する本を地球儀のように巡らせた。奥に出っ張った尻尾のようなパートにアートや身体論関係を。実際の配置は内部に足を踏み入れて確かめていただく他ない。配列の方法を考える際に、念頭にあったのはロンドン大学のヴァールブルク研究所の文庫だった。本と本との「よき隣人関係」、『本の神話学』の著者の蔵書ならではの贅沢だ。実際、『本の神話学』の巻末「文献案内」の本がそこに見いだされる。

ただ、山口さん自身がこの書棚の配列について注文をつけたことは一度もない。書架の配置はいわば仮説的なものであって、その時抱えているテーマに沿って、また文庫に人を迎える際やイベントに合わせて、入口近くの書棚は本を入れ替えることがよくあった。……

山口文庫を散歩していると、奥に積み重なり忘れられたような本があり、気の向くままに開くと、山口さんの引いた青と赤の鉛筆によるアンダーラインを発見することがよくある……赤鉛筆のアンダーラインや付箋は、後から使う際の注意を促すマークでもあるが、読むという行為の喜びのジェスチャーでもある……個人文庫は読む行為の集積が、本という生

命を持った物の群れになってそこにあるものだ。そして、読む人を通して、それは形ある記憶の姿であると同時に、新たな思想をすでに胚胎している姿でもある。

一般の図書館も、書店の書架も「本の群れ」にちがいない。しかし、図書館が一般利用の為の普遍性を追求すれば電子図書館化へ行きつく。電子テキスト化は、文脈を離れて部分を浮遊させる。本を一章ごとに切り売りすることだってやがて行われるだろう。「個人蔵」という印だけならば、デジタルアイテムとして付け加えればよい。

では、未来のデジタルライブラリーと、個人文庫や一群の書物の決定的な差はなんだろう」と石塚はデジタル化に疑問を投げかける（石塚、2010）。

個人文庫がせめて、「群れ」として別置されること、あるいは仮想書架としての冊子目録の作成ができるならば多少なりともモノと思考との関係を見ることができのかもしれない。だが、石塚が山口文庫で試みた配架はある時の山口を切り取っただけともいえよう。山口が亡くなった今となつては、それでかまわないかもしれない。山口の研究を継ぐ者、あるいは山口その人を研究しようとするには、札幌大学に収蔵された蔵書以外に東京に残された部分をなんとか補充できないものかと考えるのではなからうか。図書館学の先達ランガナータンの5原則の一つ「図書館は成長する有機体である」がここにも適応されるのではと思う。

たとえば、東京女子大学の「丸山眞男文庫」のように丸山の弟子、孫弟子たち、丸山研究をという研究者が多数存在し、文庫を守りながら彼の遺稿を使った研究会が続けられ、それがまた編纂されて刊行されるというサイクルが続くならば個人文庫が有機的に発展している。しかし、これはまれなケースである。

「山口文庫」目録を一般的な形で作ることの試みは困難であるように思える。もし、仮想空間的な書架目録が可能であるならば、石塚の書架配列を生かした目録化ができるであろう。松岡正剛が丸善丸の内本店で実験した松丸本舗の棚にもつながるといえる（松岡、2010、2012）。

そもそも、山口昌男が文化学部新設にあわせて札幌大学に赴任した際には、もっと壮大な構想があった。その一つが札幌大学図書館にあるもう一つの個人文庫目録として刊行された『芸能関係資料目録：郡司正勝氏旧蔵』である。そのことについても石塚が山口の定年退職記念号の文化学部紀要に書き残している（石塚，2005）。

「郡司正勝文庫の設立。故郡司正勝先生（元早稲田大学文学部教授・演劇芸能史歌舞伎研究）は札幌すすきのの出身で、札大に山口先生による文化学部が新設されるならばその蔵書を寄贈したいという意向を受けて設置された。郡司先生は98年に亡くなったが、2004年には札大図書館の努力により長大な目録が完成した。その後松本克平の蒐集資料を図書館に購入、郡司文庫とあわせてユニークな演劇関係資料を形成している。また故高橋康雄（元札幌大学文化学部教授・メディア・近代文学研究）先生の蔵書約6000点がご遺族のご好意により6号館のチャットングループに保管されることになった。その後故藤田省三（元法政大学教授・政治思想史）先生の蔵書寄贈の話も進められたが、これは途中で頓挫した。山口先生は札幌大学図書館に既にある川島武宣文庫、松田道雄ロシア関係文庫などとも呼応させて、すぐれた研究者の個人蔵書を大学が持つことの有形無形の効果を考えていた。

そして、札大図書館内に異例の（下線石塚）文化学部図書コーナー（文化学部設立のための準備期間*に収集した古書及び洋書類）を設置する。通常では図書館の方針どおり十進分類によって館全体にばらまかれ配架されるが、文化学を構想するために必要な書物群を目の前に出現させることで、学部学生の指針としたいと考えられたのだろう。図書館がレファレンスブック群と専門書群と、ある宇宙像を描く書物に遠近感を与えようとした。大学図書館の在り方に対しての問題提起であり、文化学部がリードすべき一つのテーマとして位置づけられた。

コンピュータ検索し本に行きあたるだけでなく、書物が蒐められ置かれる場・空間（図書館だけではない）の意味を考えさせ、身体的にそれを突き止めることの重要性、また書物との連続的な出会いから横断的に文化への視野が開けていく楽しさに気づく機会を学生たちに与えることを示して

いる」(石塚, 2005)と説明される。

さらに「幻の札幌大学文化学部“劇場”構想も欠かすことができない。劇場は文化学部設立前に約束されていたが実現しなかった。イタリアの建築家が設計したプランとその模型が存在することから当初、劇場プランは現実性を持っていたことがわかる。……『木の劇場』で……その外部は野外円形劇場になる。観客席は洋楽対応の椅子式にもなるし敷敷形式にも変更可能である。階上には郡司正勝文庫を設置し、演劇芸能関係のマネジメントやプロジェクトやプロモートを学ぶ実験場としても位置づけられていた」(石塚, 2005)というように、演劇芸能関係の郡司文庫、プロレタリア演劇運動の松本克平が蒐めたパンフレットやポスターが劇場と図書館を結んで有機的に幅広く文化学という教育を展開しようとしていたことが明らかになる。アメリカの大学都市で広いキャンパス内に劇場と博物館、美術館が設けられて近隣住民とも交流しているのを想像するとよい。残念なことに山口学長体制が終わり、さらに少子化による入学生の減少が重なり、劇場も演劇学科も実現しないままに終わった。札幌市が都心部に文化芸術基本計画として計画中の市民交流複合施設(劇場)では地域の大学との連携が謳われているので、実現されるならば、ある意味で山口昌男の夢が叶うことになる(札幌市, 2013)。

山口によって札幌大学図書館には山口文庫、郡司文庫、松本コレクション、文化学部図書コレクションが残された。また、それまでに個人文庫として受け入れられた法社会学者の「川島武宣文庫」、「松田道雄ロシア関係文庫」がある。川島文庫には冊子体の大部な目録、松田文庫には簡略目録が『札幌大学女子短期大学部紀要』(36)にまとめられている。

4. 個人蔵書は最終的に個人に帰属するのか、あるいは？

戦時期に蒐集した蔵書を一気に失った体験を持つ人には個人の蔵書にはあまりこだわらない気持ちもあるようだ(津野, 2015, 72-74)。こうした感慨は筆者の恩師鳥山成人や知り合った亡命チェコ人でアメリカ議会図書館スラブ部長 P. ホレットキーからも感じたことでもある(松田 J., 2013)。

内澤のルポルタージュに登場する阪神淡路大震災を経験した茶道史研究者熊倉功夫にもみうけられる。東日本大震災での個人蔵書喪失感に関する文章にはまだ気づいてない。もっと時間がたたなければならぬものと思われる。一方で図書館が崩壊からどう回復したかについての記録には枚挙に暇がない。これは、公共財としての図書館という考えが広く受け入れられている以上に、多くを失った人々にとって図書館の果たす意味が大きいと考えられているのだろう。

個人の蒐集した資料がその個人的な役割を終えた後、塊として公共の文化資本として図書館に収められるのは、理想的な形であろう。ただ、これまで述べてきたように、日本の現状は、よほどの条件がそろわない限り、図書館に塊のままに保存され、整理されることは難しい。

しかし、蒐集者の思考が蔵書に反映されていることを考えるなら、個人蔵書が一括まとめて保存されることの意義は大きいといえる。とはいえ、完全な形で蔵書がまるごと保存されるということはまれである。一つの理由は、多くの場合受け入れるまでに既に図書館が所蔵している図書との重複である。貴重で重要なものであればその限りでないのだが、一般には書庫スペースの関係で全体を受け入れることは少ない。

また、図書館に収蔵されるときには図書館の分類が施されるので、蒐集者の本棚に並べられていた状態から離れて、いわゆる図書館学での主題分類に従って並べられることになる。当然のことだが、ここでは蒐集者の構想とは違ってしまう。このことは内澤のルポルタージュや石塚による山口文庫での、並べ方の問題という形で述べられた話である。一方、梅棹は「国立民族学博物館の書庫には、梅棹文庫のほかにライヘル＝ドルマトフ文庫とか、ほかに牧野巽文庫とか、泉靖一文庫とか、加藤九祚文庫とか、個人名を冠した文庫がいくつかある。寄付もあれば購入したものもあるが、いずれも個人の蔵書に由来する。これらの個人文庫をそれぞれひとまとまりのものとして別置するかどうか議論されたが、わたしは基本的には別置の必要はないとかんがえている。一般の図書といっしょに、共通の分類に従って配架されておればよいのである。本にはそれぞれの個人文庫名の押印がされているし、コンピューターでいつでも検索できるのだから問題は

ない。これにはしかし、別置の方が便利だという意見もあるようである」という（梅棹，1993b, 386-387）。

いずれにしろ、図書館総体の蔵書構成という点からするならば、個人文庫の特色を残したままのメンテナンスを考えるのは二重の作業を強いられると受け取られかねない**。

ただ、ある専門分野を代表するような文庫であるならば、重要資料が欠けたままであればそれを埋める必要があるだろうし、新たに出た資料を補うことを続けながら蔵書構成がより良い状態になっていなければならないだろう。一方で、個人の思考がどうであったかということに重点を置くならば、文庫を受け入れた時点までの構成が問題とされよう。ただし日本の大学図書館と研究者の関係から考えると、大学図書館の蔵書と研究室に置かれた個人蔵書が相補うような形で研究されていることが多い。従って、あの研究者が在籍した大学図書館ならあるだろうと思っていると、それが無いということになる。この意味からは個人蔵書が大学図書館に受け入れられ、はじめて図書館が全体として機能するということになる。単純に考えるならば、受け入れ時点での目録を完成させた上で、重複分は処分するという図書館の判断も妥当性があるということになる。

個人文庫については蔵書の由来など個人との関係がやはり重要であろう。筆者が札幌大学図書館の「松田道雄ロシア関係文庫」について調べた結果を発表したのは、松田が既に亡くなった後になってのことで、松田道雄の小児科医、社会評論家という側面を語る蔵書の塊が熊本学園大学図書館に一括収蔵されたことになったと、知るのはさらに遅れてしまった（松田J., 2000）。熊本学園大学図書館にとっても、札幌大学図書館に入った図書は「生前にロシア史関係雑誌を札幌大学に寄贈されたとのことですが、それでも全体に占める雑誌の割合は案外多かったですね。」（熊本学園大学図書館, 2001）といわれる。しかし、札幌大学図書館に贈られた蔵書には雑誌は *Slavic Review* などの端本がごくわずかであり、お互に松田道雄の旧蔵書全体像については見えていなかった感がある。

図書館の現状をみると、図書資料費が削られるだけでなく、図書館職員の外部委託が大学図書館でさえ恒常化されているなかでは、日常業務に加

えて一時に大量の蔵書を受入れると判断をするのは、よほど双方の条件が折り合わなければならないだろう。

最近も、彫刻家高田博厚が1931年からほぼ四半世紀にわたって、フランス滞在中に蒐めた文学・芸術の蔵書の受入先が見つからないままに散逸しそうだ、という話を聞いた。

バブル経済のころ外貨減らしの為に、とって海外から貴重な蔵書を一括して購入をするという、第1次世界大戦後にヨーロッパから文化遺産として絵画（大原美術館の松方コレクション）や図書（一橋大学のメンガー文庫など枚挙にいとまがない）を購入したのと、並ぶようなことがあったことが信じられない話だ。

本来図書館という施設はさしあたりの利用者がいない資料まで保存する、という点にそのひとつの特徴、本質があるといえる。しかし、武雄市のTSUTAYA 図書館問題で旧佐賀藩の蘭学資料がどうなるのだろうか、心配するオランダ経済史研究の大家からの話などを聞くにつけ、日本では教育文化に対する長期的な考えがないのではと情けなくなる。

5. 図書館の電子化と個人蔵書あるいは個人文庫

電子図書館化が進むなかで個人蔵書、あるいは図書館の紙の蔵書（形あるもの）はどうなってゆくのだろう。電子図書館化が行われる理由には、所蔵スペース、酸性紙資料の劣化、検索の手軽さなどが挙げられる。

このような時代に古典学者ウンベルト・エーコと脚本家ジャン＝クロード・カリエールは、『もうすぐ絶滅するという紙の書物について』という本で電子化される文化資料について、インタビューに答える形で語り合う。「耐久メディアほどはかないものはない」という章のなかで電子メディアについて、このたかだか20年ほどの間で、誕生しては消えていったと述べる。エーコはそれと比べて紙の本の寿命の長さをいう。書物が消失したのは、ほとんど検閲か火事で燃えてしまったかだ。

一方カリエールは、フィルムと電子カセットあるいはCD-ROM、さらにDVDに至って、ようやく個人の映像保管ができるようになったとい

ながら、電子カセットや数年前まで使っていた古いCD-ROMは、今や読むことも観ることもできないという。それに加えてテレビ放送の誕生期に録画なしに撮られた番組が、たまたまテレビの画面をフィルムで撮影した記録が残っていたので、博物館の宝になっているという。希少な映画フィルムを大事に保存するようになったのも、ごく最近のことだし、脚本の蒐集が行われるようになったのは、もっと後のことだという。それまでは、脚本は撮影が終わるとゴミ箱行きになっていたという（エーコ、2010）。これは、日本のテレビ界でも同様であったというのは倉本聰の回想にも現れる（倉本、2013）。

大事なことは、これらの新しいメディアの再生が可能になるのは、ハードと電気がなければならぬという点だ。大規模で長時間にわたる停電が続いた場合に、膨大なデータ資料が失われてしまう可能性があるのは、これまでの紙の資料が火事や戦争で無くなる以上に大きな損失になるだろう、とエーコとカリエールは怖れる。

さらに二人は、最後の章「死んだあと蔵書をどうするか」の中で、カリエールは蒐集した蔵書の一部は既に古書店主に預けて売却を依頼したという。シュールリアリスト関連の一部には、手書き原稿や献辞入りの著作などがあり、それを少しずつ売ってしまったという。借金が終わったときにまだ売れ残っていたものを戻してもらって、「前に飲んでしまったと思っていた上等のワインの瓶が、手つかずのまま残っていたのを見つけたとき」のようだったといい、残された本は妻と二人の娘が決めるだろうが、遺言でこの本は友人の誰それにという指定をするかもしれないという。一方のエーコは、「自分が集めたものに関して望むことは、もちろん、ばらばらにしないでほしいということですね。家族が公共図書館に寄贈したり、オークションで売ったりする可能性も出てくるでしょう。その場合は、丸ごと一つのかたまりとして売ることが条件です。私にとって大事なことはそれだけです」と語る。この話を受けてカリエールは「長いあいだ大変な思いをして構築した作品のようなものを解体されたくはありませんよね。……それはたぶんあなたの書いた本と同じくらい雄弁にあなたのことを語るものでしょう。私の集めたものに関しても同じことです。私の蔵書の

支離滅裂ぶりも私のことをよく語っています。」ただ、この二人のコレクションは、いわゆる古書愛好家（ビブリオフィル）の話になり、大学図書館の研究資料の蔵書とはかけ離れてしまう（エーコ、2010）。

その点アメリカ・デジタル公共図書館（DPLA）設立委員長ジョン・ポールフリーの『ネット時代の図書館戦略』で語られることは、電子化について前向きであり、また現実的でもある。現在の図書館を紙と電子の過渡期と位置づけ、これまでの紙資料と旧来の図書館はネットに取って代わられてしまうという最近の楽天的な意見に対して反論する。電子化の中にあつて、図書館は社会にとって、自由で平等な情報を無料で提供する施設となり、その手助けをする司書はアーキビストとともにこの社会や暮らしの歴史記録を保持していくためにこそ必要なのだとする。またデジタル化しても、印刷物の保存が必要だと説き、民間企業によるのではない、情報の幅広いアクセスと保存の場としての図書館の役割は未だに変わっていない。また、その援助者としての司書の重要性も変わらないといっている（ポールフリー、2016）。

エピローグ

図書館には二つあつて、一つは総合図書館であり、もう一つは個人の蔵書を中心とする文庫だというのが山口昌男の考えであつた（山口、2003）。

しかし、ごく一般的な読書人の書斎を形成する個人蔵書の運命は、幕末の国学者長沢伴雄の蔵書印「我死ナハウリテ黄金ニカヘナム、オヤノ物トテ虫ニハマスナ」というのが正解なのだろう。しかし、一般には古書の市場価格の暴落とともに、貴重なもの以外は手数料を払わなければ持つても行ってもらえない、ということになっているというのが、親しい古書店主の談である。

雑本、雑書、映画、演劇、音楽会のパンフレットを含め、あらゆる印刷資料が時代を明らかにする貴重なものだ、といくら頭でわかっていたとしても、蔵を持っているような資産家でもないわれわれには、いずれ故人の思い出とともに焼き捨てられて終わるのだ。それとて、都会では焚き火を

しながら、要、不要とつぶやいて、自らの手で書籍や書類を簡単に燃やすことさえできない。ただゴミ収集業者に手数料とともに集められてゆくのを待つ以外ないのだろう。

研究者という知的職業に従事していた者たちの知的資源は、そのような生活を背後から支えてきた無名の人々の将来に資するための文化資源として残されるべきであろう。本来それを保証するのが図書館であり、アーカイブズなのであろう。残念ながら日本では未だその認知は低いままである。何年も前に国立大学図書館協会、日本学会会議などが政府の学術情報の蓄積保存流通に対して要望提言を出しており、国立国会図書館や国立情報学研究所などでの電子化がそれなりに予算化されている（小西，2009）。しかし、まだ十分とはいえない。それどころか、文部科学省から人文・社会科学、教育系の基礎的学部を廃止転換するとも、とられかねない声明が飛び出すなかでは、古典資料や図書館蔵書を保存充実し、利用促進を進めるための人材育成など夢のまた夢とも感じる。

そして、はじめに戻ると、私たち二人の蔵書はとりあえずは、自宅に戻される途中で、いくらかは必要とされるだろう友人の手に、そして古書肆の流通のなかで多少減ることになるだろう。がしかし、それにしてもこの本をどうしようか？

注記

* 大学設置基準で図書館を置くことと、学部構成などによって図書の数量なども決められて設置の根拠となっていたが、1991年の関連法規のいわゆる大綱化によって数値基準はなくなっている。

** 山口文庫の整理をボランティア的に続けていた石塚千恵子氏の『山口文庫通信』（0号1999から9号2003）は、なぜか札幌大学図書館の蔵書目録には見つからない。国内での所蔵は北海道大学図書館のみである。個人文庫が受け入れられた後のメンテナンスまでは、なかなかうまくゆかないという例になるかもしれない。

参考文献

- 秋月孝子 (1993) 「〈資料紹介〉北大におけるロシア関係資料:個人コレクションとロシア語マイクロ資料」『スラヴ研究』(40), 185-232
- アメリカ図書館協会、図書館蔵書・整理業務部会編 (1995) 『ALA 蔵書の管理と構成のためのガイドブック』日本図書館協会
- 飯島朋子 (2007) 「社会科学の総合大学〈一橋大学〉の蔵書コレクション構築の概要」『情報の科学と技術』57(12), 581-584
- 石塚純一 (2005) 「山口昌男先生と札幌大学文化学部」『比較文化論叢』(16), 7-16
- (2010) 「〈群れ〉としての本」『丸善ライブラリーニュース』(10), 14-15
- 内澤旬子 (2011) 『センセイの書齋:イラストルポ「本」のある仕事場』(河出文庫) (2006年幻戯書房刊)
- 梅棹忠夫 (1993) 「大学の使命と大学図書館の役割」『梅棹忠夫著作集』(22) 所収 (初出『学術月報』29(9), 1976)
- (1993a) 「著作目録をつくる」『梅棹忠夫著作集』(22) 所収 (初出『梅棹忠夫著作目録』中央公論社 1979)
- (1993b) 「個人文庫の形成と管理」『梅棹忠夫著作集』(22) 所収 (初出『民博通信』(44), 1989)
- (1993c) 「図書館と学術情報」『梅棹忠夫著作集』(22) 所収
- (1995) 『夜はまだあけぬか』(講談社文庫)、(親版講談社 1989 刊)
- エーコ, U.・カリエール, ジャン=クロード・工藤妙子訳 (2010) 『もうすぐ絶滅するという紙の書物について』阪急コミュニケーションズ
- 岡崎武志 (2013) 『蔵書の苦しみ』(光文社新書)
- 河合弘志・柿沼隆志 (1983) 『アメリカ図書選択論史の研究』大東文化大学図書館学講座
- (1987) 『アメリカにおける図書選択論の学説史的研究』日本図書館協会
- 河村俊太郎 (2008) 「蔵書構成の分析から見た東京帝国大学文学部心理学研究室図書室の研究補助機能」『日本図書館情報学会誌』54(4), 223-240

- 菅真城 (2013) 『大学アーカイブズの世界』 大阪大学出版会
- 神立春樹 (1996) 『大学図書館図書資料論』 御茶の水書房
- (2005) 『大学図書館の在り方を追って：教員の大学図書館関係』 御茶の水書房
- 菅野耕毅 (2006) 「川島文庫によせて」 『X o J M 札幌大学図書館報』 (26), 2
- 熊本学園大学図書館 (2001) 「特集松田道雄文庫」 『大楠』 (29), 2-8
- 国立国会図書館参考書誌部編 (1977) 『全国特殊コレクション要覧』 改訂版
[———] (984) 「国立国会図書館所蔵個人文庫展：古典籍探究の軌跡」 出品リスト 『参考書誌研究』 (27), 58-63
- 草森紳一 (2005) 『随筆本が崩れる』 (文春新書)
- 倉本聰 (2013) 『[[聞き書き] 倉本聰：ドラマ人生』 北海道新聞社
- 小西和信 (2009) 「人文・社会科学の学術情報流通 (上)」 『丸善 Library News』 (6), 6-7
- 佐藤隆司 (1977) 「歳書目録 (洋書) の諸問題：特殊文庫の成立時期と目録によるカバー率 (馬場重徳教授退官記念号) 図書館短期大学紀要 (13), 137-142
- 札幌大学図書館編 (1995) 『札幌大学図書館蔵川島文庫目録』 札幌大学図書館
———編 (2003) 『芸能関係資料目録：郡司正勝氏旧蔵』 札幌大学図書館
- 柴田文隆 (2010) 「書物の大いなる連鎖」 『丸善ライブラリーニュース』 (9), 10-11
- 津金幹彦 (1985) 『図書館資料の構築：司書と図書の接点を訪ねて』 東海大学出版
- 津野海太郎 (2006) 「日本の大学図書館の研究支援機能」 『東西南北』 (2006), 275-277
- (2015) 『百歳までの読書術』 本の雑誌社
- 西牟田靖 (2015) 『本で床は抜けるのか』 本の雑誌社
- 日外アソシエーツ編集部 (2005) 『個人文庫事典』 1 - 2
- 芳賀徹 (1982) 「「国立国会図書館所蔵個人文庫展：西欧学術の追求」を見て」 『国立国会図書館月報』 (261), 12-14

バーク, P. 井山弘幸訳 (2015) 『知識の社会史 2 : 百科事典からウィキペディアまで』新曜社

一橋大学編 (1975) 『一橋大学附属図書館史』一橋大学

平井紀子 (2016) 『図書館員のための解題づくりと書誌入門』(図書館サポートフォーラムシリーズ) 日外アソシエーツ

細谷新治 (1987) 『私の体験的書誌学』私家本

——— (1980) 「全国経済学書コレクション：日本にある経済学関係洋書の特珠文庫」『経済学セミナー』(300), 86 - 107 【上記 [1980] に「特珠文庫導入史のための覚書」と改題して一部が抄録されている。なお地図は再録されていない。】

ポールフリー, ジョン. 雪野あき訳 『ネット時代の図書館戦略』原書房

松岡正剛 (2010) 『松岡正剛の書棚：松丸本舗の挑戦』中央公論新社

——— (2012) 『松丸本舗主義：奇蹟の本屋、3年間の挑戦』青幻舎

———・イシス編集学校 (2015) 『インタースコア：共読する方法の学校』春秋社

松田潤 (2000) 「札幌大学図書館松田道雄氏旧蔵ロシア史関係コレクションについて」『札幌大学女子短期大学部紀要』(36), 57-87

——— (2013) 「電子書籍と紙の本：個人的な経験から図書館に与える影響まで」『札幌大学女子短期大学部紀要』(60/61), 53-78

——— (2013) 「T先生あるいは勲章と蔵書の関係」『X o l m 札幌大学図書館報』(38), 2

松田芳郎 (2011) 「岐路に立つ大学図書館：電子化と定員削減のなかで」『青森公立大学紀要』16(1・2), 49-63

——— (2011a) 「青森往還記：青森公立大学図書館への松田寄贈本についての覚書」『青森公立大学経営経済学研究』16(2), 3-32

——— (2013) 「大学図書館の蒐書再論：図書館情報学的資料分類論または幕間のつぶやき」『青森公立大学紀要』18(1・2), 43-71

松原隆一郎 (2014) 『書庫を建てる：1万冊の本を収める狭小住宅プロジェクト』新潮社

村上陽一郎 (2011) 『あらためて学問のすすめ：知るを学ぶ』河出書房新社

森俊司 (1997) 「花洛夷川通に松田先生を訪ねて」『X O J M 札幌大学図書館報』(8), 8

山口昌男 (1971) 『本の神話学』中央公論社

——— (2003) 「大正自由教育からのメッセージ」『山口昌男山脈』(3), 3-15

山根泰志 (2009) 「忘れられた文庫たち：中央図書館所蔵幕末明治期旧蔵書群」『九州大学附属図書館研究開発室年報』(2008/2009), 27-30

——— (2011) 「旧制福岡高等学校蔵書」『九州大学附属図書館研究開発室年報』(2011/2011), 32-41

山本昭和 (2010) 「図書館資料の収集と選択：公立図書館蔵書構成論の理論的發展」『図書館界』61(5), 512-518

若杉隆志 (1990) 「個人文庫の冊子目録を検討する」『大原社会問題研究所雑誌』(378), 33-43

熊本学園大学図書館蔵松田道雄文庫

<http://www.lib.kumagaku.ac.jp/collection/matsuda-bunko/>

札幌市文化芸術基本計画

<http://www.city.sapporo.jp/shimin/bunka/kihonkeikaku/>

初校校正時に山口昌男夫人が亡くなられたと知った。山口家にまだ大量に残されたままの蔵書の行く末を、最期まで気になさっていたと仄聞する。また、U. エーコ氏も亡くなったというニュースも飛び込んできた。